



## 映画『標的』

(2021年製作、西嶋真司監督)



1991年8月14日、<sup>キムハクスン</sup>金学順さんが、歴史上初めて、ご自身の「慰安婦」被害をソウルで名乗り出、これが今日の日本軍「慰安婦」問題の事実上の発端となりました。実はその3日前、金さんについて「女子挺身隊の名で戦場に連行され、日本軍人相手に売春行為を強いられた」と書いた記事が、朝日新聞に掲載されています。この記事を書いたのは、当時朝日新聞の記者だった植村隆さん（現在、「週刊金曜日」発行人）です。

2014年、社会の右傾化の波の中で、この記事を捏造とする批判文が「週刊文春」に突然掲載され、これを機に、植村さんやそのご家族に対する、右翼からの執拗なバッシングや激しい脅迫が始まりました。植村さんはこれらを名誉毀損として2つの裁判を起こしましたが、2021年3月までに、最高裁判所は訴えをいずれも棄却しました。

映画『標的』は、植村さんと彼を支える多くの弁護士、ジャーナリスト、市民たちの、今日に至る不屈の闘いを描いています。なぜ、何を根拠としてこのようなバッシングが起こり、裁判所は植村さんの訴えを棄却したのか。日本社会に張り巡らされる暗い政治権力のネットワーク、ジャーナリズムと司法の危機

的な状況が、ここに浮かび上がります。

植村さんは、この闘いの中でソウルのカトリック大学校に教授として招聘され、韓国でカトリックの洗礼を受けています。

このほど、『標的』が、第64回JCJ（日本ジャーナリスト会議）賞\*1（2021.8.15受賞）、及び韓国の第33回アン・ジョンピル自由言論賞（2021.10.18 発表）\*2を受賞し、日本カトリック正義と平和協議会も「推薦映画」に認定いたしました。（2021.10.15）。日本カトリック正義と平和協議会では自主上映会を企画中です。

映画『標的』の詳細は、公式サイト（<https://target2021.jimdofree.com/>）をご覧ください。自主上映会などの情報もこちらからご覧ください。

\*1 JCJ賞 新聞・放送・出版などにおける毎年の優れたジャーナリズムの仕事を顕彰するもので、1958年に始まりました。

\*2 アン・ジョンピル自由言論賞 権力などに屈することなく、言論の自由の促進や真実の報道で卓越した業績があった人に与えられる賞で、1987年以来、毎年授与を行ってきました。